努力事項解説　その９　①　（特別活動）

学校の実態や児童生徒の発達段階、特別活動の特質を踏まえるとともに、各活動・学校行事を通して育てたい態度や能力を明確にした創意ある指導計画を作成しましょう。

学級や学校の実態を考慮した指導計画を作成しましょう。

学級活動では、以下の点について学級の実態を考慮する必要があります。

人間関係　　集団としてのまとまり　　特別活動の経験の状況

児童会活動やクラブ活動、学校行事については、以下の点について学校の実態を考慮する必要があります。

児童数や学級数などの学校規模　　指導に当たる教師の人数

組織などの人的条件　　施設設備などの物的条件など

児童の発達の段階を考慮した指導計画を作成しましょう。

これについては、以下の３点について考慮する必要があります。

「発達課題」について

発達課題とは、人がよりよく発達を遂げるために、人間としてそれぞれの発達時期に達成しておくべき課題のことです。具体的には以下の７点が考えられます。

- ○　普通の遊びに必要な身体的技能の習得
- ○　自分の身体に対する健全な態度の形成
- ○　友人との適切な仲間関係の成立
- ○　読み・書き・計算の基礎的な技能の発達
- ○　良心・道徳性・価値判断の尺度の発達
- ○　人格の独立性の発達
- ○　各種の社会的態度の発達

「学校生活における集団活動の発達的な特質」について

（小学校学習指導要領解説特別活動編より）

（１）低学年

小学校への入学当初においては、幼児期の自己中心性がかなり残っており、学校の中の児童相互の関係は、個々の児童の単なる集合の段階にある。また、教師と児童との関係が中心で、児童相互の人間関係は少ない。さらには、行ってよいことと悪いことについての理解はできるようになるが、感情的、衝動的な言動が多く、入学期に小学校生活や集団生活にうまく適応できなかったり、このことによって授業が成立しにくい状況が生まれたりするなどのいわゆる「小１プロブレム」の問題も生じてくる。

第１学年後半になると、教師を中心とする学級集団への所属感や一体感が現れ始める。また、２，３人の小グループにおいて仲良く活動することはできるようになる。しかし、友人関係は全体として流動的で結びつきも弱く、学級全体としての集団のまとまりは欠けている。

第２学年になると、活動の中心となる児童が目立ちはじめ、他人の立場を認めたり、理解したりしようとする態度や、よりよい学級生活を築こうとする自主性なども次第に高まってくる。学級の中のそれぞれの集団は、仲間としての結びつきもその期間も次第に長くなり、その成員数も増え、小集団での協同的な活動ができるようになってくる。また、学級全体に目を向けたり、学校に対する所属感を少しずつ深めていくようになる。さらには、役割を分担して活動したり、決まりの大切さを認識して生活したり遊んだりすることができるようになる。

（２）中学年

第３学年になると、集団の中の仲間としての結び付きや集団としての閉鎖性が次第に増大し、協力して楽しい学級生活をつくろうとする小集団による活動が盛んになる。また、この時期は、集団感情や集団意識が強く育ってきて、いわゆる「われわれ意識」などの仲間意識が高まってくる。しかし、指図する者とされる者が次第にはっきりしてきて、それぞれの仲間集団としての小集団が分立し、集団同士の対立や集団への付和雷同的な行動も見られるようになってくるなど、学級全体としてのまとまりが育ちにくい時期でもある。集団活動を行うにしても、それぞれの集団での活動目標について、ある程度共通に理解して持続して活動することができるが、まだ、個人的な興味・関心や要求に動かされることが多く、その集団に所属する成員の間にはっきりとした相互依存の関係は見られない。

第４学年になると、集団目標の達成に主体的にかかわったり、協同の活動に取り組んだりして、リーダー的な児童を中心に教師の力を借りなくてもある程度の計画的な活動ができるようになり、自分たちで決まりをつくって守ろうとするなどの自主性も増してくる。また、クラブ活動に参加するなど、学級生活のみでなく学校生活全般に興味・関心を広げ、自発的に活動しようとする意欲が強くなる。また、男女の活動の違いも見られるようになり、男女別の小集団もつくられるようになる。

（３）高学年

第５学年になると、中学年までの経験を生かして、自分たちで決めた集団の活動目標をできるだけ大切にし、常に実践活動を振り返り、改善しながらこれを達成しようとする感情や意識が強くなる。学級全体としてまとまった活動ができるようになり、友達の長所や短所なども客観的にとらえられるようになるとともに、目標を実現するために、互いに信頼して支え合って活動することを強く求めるようになる。また、集団としての実践や自分の言動について振り返り、改善するなどしてよりよい生活を築こうとする意欲が高まってくる。さらには、児童会活動やクラブ活動の運営に参加するなど、学校生活の改善や向上にも目を向け、学校全体の集団をまとめようとする意識や活動も見られ、自分の役割や責任などについての自覚が深まってくる。

その一方で、思春期にさしかかるこの時期の児童の価値観は、ときに、理想主義的であり、一面的で独断的な傾向になりやすく、相手に批判的になったり自分の価値判断に固執しがちになったりする。また、他者と自分を比較して自分に自信が持てなくなったり、些細なことで友達との関係が壊れたり、友人への不信感をもったり、傷付いたりして悩みや不安を感じるようにもなる。また、この時期の学級は、男女など心身の成長の差が大きい中で、共に生活していることも特徴の一つである。

第６学年になると、児童会活動やクラブ活動、学校行事などにおいて中心的な役割を担うようになり、最高学年としてリーダーシップを発揮しようとするなどの意識や態度も育ち、役割や責任を自覚して活動するようになる。また、思春期特有の不安定な感情がより大きくなり、人間関係に悩んだり、先頭に立って活動することに消極的になったり、中学校生活への不安を抱きながら生活する児童も少なくない。

「発達の段階に応じた指導のめやす」について

（小学校学習指導要領解説特別活動編より）

（１）「学級活動（１）学級や学校の生活づくり」について（例）

	話合い活動	係活動	集会活動
	仲良く助け合い学級生活を楽しくする		
低学年	・教師が進行等の役割を受け持つことから始め、少しずつ児童がその役割を担うことができるようにしていく。 ・友達の意見をよく聞いたり、自分の意見を言えるようにしたりして、学級生活を楽しくするための集団決定をすることができるようにする。	・当番的な活動から始め、少しずつ創意工夫できる係の活動を見付けられるようにする。 ・少人数で構成された係で仲良く助け合って活動し、学級生活を楽しくすることができるようにする。	・入門期には教師が主導して楽しい集会活動を多く経験できるようにする。 ・児童が集会の内容を選択し、簡単な役割や準備をみんなで分担して、だれとでも仲良く集会活動を楽しむことができるようにする。
	協力し合って楽しい学級生活をつくる		
中学年	・教師の適切な指導の下に児童が活動計画を作成し、進行等の役割を輪番で受け持ち、より多くの児童が司会等の役割を果たすことができるようにする。 ・異なる考えなどについてもしっかりと聞いたり、理由を明確にして意見を言えるようにしたりして、楽しい学級生活をつくるために、折り合いを付けて集団決定ができるようにする。	・様々な活動を整理統合して児童の創意工夫が生かせるような係活動として組織できるようにし、協力し合って楽しい学級生活がつくれるようにする。 ・朝や帰りの時間などを生かして、積極的に取り組めるようにする。	・集会活動の経験を生かし、ねらいを明確にして、創意工夫を加え、より多様な集会活動に取り組めるようにする。 ・計画や運営、準備などにおける役割を、より多くの児童が分担し、協力し合って楽しい集会活動を作ることができるようにする。
	信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくる		
高学年	・教師の助言を受けながら、児童自身が活動計画を作成し、進行等の役割を輪番で受け持ち、話合いの方法などを工夫して運営することができるようにする。 ・学級のみならず学校生活にまで目を向け、自分の言葉で建設的な意見を述べ合えるようにし、多様な意見のよさを生かして、楽しい学級や学校の生活をつくるためのよりよい集団決定ができるようにする。	・自分のよさを積極的に生かせる係に所属し、継続的に活動できるようにする。 ・高学年としてふさわしい創意工夫のできる活動に重点化するなどして、信頼し支え合って、楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることができるようにする。	・児童会活動やクラブ活動の経験を生かして、学級生活を楽しく豊かにするための活動に取り組めるようにする。 ・話合い活動によって、互いのよさを生かしたり、反省を生かしたりして、信頼し支え合って創意工夫のある集会活動をつくることができるようにする。

（２）「学級活動（２）日常の生活や学習への適応及び健康安全」について（例）

①　低学年

小学校の入学時には、就学前教育との接続に配慮して指導の重点化を図ることが必要である。いわゆる小１プロブレムなど集団への適応の問題を解決することは、この後の学級や学校での生活を充実させる活動を展開していく上で不可欠である。また、基本的な生活習慣が定着するよう、適切な題材を設定するとともに、計画的に指導することが大切である。

低学年においては、特に問題の解決方法について考え、正しい方法や自分に合った方法を選んで、目標を持って努力できるようにすることが大切である。

なお、このような指導については、学級活動の指導を中心にして、個に応じて繰り返し指導したり、家庭と連携して指導したりするなどの配慮が大切である。

②　中学年

中学年のだんかいになると、学校生活にも徐々に慣れ、活動範囲も広がっていく。その一方で小集団をつくり、その集団を中心に活動したいと願う児童も増えるため、小集団間や小集団の中で様々な摩擦が生じ、人間関係に問題が生じやすい時期でもある。このため、例えば望ましい人間関係の形成について、社会的スキルを身に付けるための活動を効果的に取り入れるなど工夫し、協力して楽しい学級生活が築けるようにすることが大切である。

中学年では、特に、問題を自分のものとして真剣に考えることができるようにし、具体的な解決方法や目標を決めて、一定期間継続して互いに努力できるようにすることが大切である。

なお、清掃などの当番活動に取り組む態度の個人差も大きくなっている時期であるため、その意義等の理解を図ることも大切である。

③　高学年

思春期にさしかかる高学年の時期は、心身ともに大きく変化する時期なので、人間関係や健康安全、食育などに関する悩みの解消などを重視するとともに、いわゆる中１ギャップの問題にも配慮し、児童が自ら現在及び将来の生き方を考えることができるようにしたり、自分に自信を持ち、よさを生かし伸ばして生活できるようにしたりすることが大切である。

高学年においては、自己の問題について真剣に受け止め、資料などを参考にして自己に合った実現可能な解決方法を決め、目標をもって粘り強く努力できるようにすることが大切である。

なお、６年生では、最高学年としての自覚を持つことができるようにするとともに、中学校における教育との接続に配慮して指導をすることも大切である。

標題には児童生徒とありますが、今回は小学校を中心に考えてみました。

また、今回は、「児童の発達の段階」を中心に記載しましたので、次回は、「特別活動の特質を踏まえること」、「各活動・学校行事を通して育てたい態度や能力を明確にすること」について考えるとともに、「発達の段階への対応の仕方」についても考えていきます。

次回は、11月1日（金）頃アップの予定です。